

主体性をはぐくむことの

困難さと大切さ

—幼児期と青年期をつなぐもの

小林隆児

東海大学健康科学部社会福祉学科

はじめに

今日の障害者福祉の世界では、当事者への福祉的援助を行う際に自己決定の重要性が叫ばれている。当事者主体の援助を考えていくというわけである。

当事者の主体性を大切にしたい援助自体には誰も異論を差し挟まないであろうが、いざ彼らの主体性について具体的に考えていくと、たいへんむずかしい問題であることがわかる。

とりわけ、広汎性発達障害（PDD）においては障理解の根幹に触れる問題であるといつてよい。

アスペルガー症候群の
青年期例より

ここで述べる事例は、以前筆者がPDDにおける「自明性」の問題について言及した時に取り上げた事例であるが、本事例はPDDの主体性の問題を考えるうえでも貴重なものであるので、ここに再掲することをお許し願いたい。

〔事例Ⅰ〕S子（初診時一七歳（高校二年生）、アスペルガー症候群（AS））

知的発達水準…IQ八五（WAIS-R）

発達歴…現在、両親とS子の三人家族。近くに父方祖父母が住んでいる。

満期正常分娩で出生。出生時の体重は二八〇グラム。人工栄養で育つ。身体運動発達に特別な遅れはなかった。初歩や発語も遅かったという印象はない。その後、目立った言語発達の遅れはなく、言葉をよくしゃべっていた。

しかし、発話は単語の羅列が多く、円滑な会話は困難であった。母親と祖母が主たる養育者であったが、どちらにも人見知りやあと追いを見せることなく、育児に手はかからなかったという。

ただ生後二カ月の頃、父がハーモニカで荒城の月を吹いたら、急にべそをかいたり、カーテンの模様をこだわるなど気むずかしい面が多々あった。幼児期からある雑誌をずっと持ち歩くというこだわりが見られ、寝る時にさえ枕元に置いていた。

それでも当時は、親もさほど心配することもなく、幼稚園から小学校低学年まで平穩に経過し、他児に比して学習面でさほど見劣りするともなかった。

小学校高学年頃から、S子は他人とももの感じ方が違うことを強く意識し始め、たびたびパニックを起こすようになった。

中学に入って、仲間から無視されるという

いじめを体験し、深く傷つき、まもなく不登校となった。中学二年の頃、死に関する不安を訴え、一〇日間ほど死ぬとはどういうことか頭から離れず、不安で落ち着きがなくなつたという。その時は母親がなんとか説得して事無きを得たが、その後、高校に入学したものの再び不登校となった。二年間休学中、筆者のもとに紹介されて母親同伴で受診となった。

これまでの発達経過の特徴から、幼児期に言語発達の明瞭な遅れは認められなかったが、乳幼児期から一貫して他者との対人関係の成立に基本的な問題を有し、独特な強迫的こだわりを示していることから、ASと診断された。

初診当時、S子は母親を初めとして他者の言動に対して非常に過敏に反応し、言葉尻に強くとらわれていた。S子が初診時に語った苦しみの内容は、以下のようなものであった。

およそ一年前からのことであるが、何もすることがなくてテレビを見ていたら、他人がやっていることを自分もやりたいと思うようになった。しかし、周囲の人たちからやっではないけなと言われているように思うようになって苦しくなった。細かいことをいろいろ

気にしてしまう。人の動作とか、人の言ったこと、やったことを見ると、そんなことができてうらやましいなと自分は思つて、自分はこんなことをやってはいけない、できなくなる、周りからやっではないけなと言われるのではないかと思ひ込んで、どんどん苦しくなってしまう。両親はやっではないよ、自由にしなさいと言うけれど、自分の嫌いな人がやっていることを見ると、今自分がやっっていることと似ているように見えてくる。周りの人はそんなふうにしなくていいんだよと言うけれど、自分ではやらねばならないと思ひ込んでしまつて。だから周りの人が信じられなくなってしまう、というのであった。

自我同一性の確立が最大の発達課題となる青年期において、ASの人々のこのころの発達上の危機がどのような形で表れてくるのかを、S子の苦悩は教えてくれる。

S子の訴えは、自分の中にこうありたいという気持ち(自我理想)が高まると、それを誰かから否定されるような気持ちが起こるために、いつも自分が望むような行動を主体的(能動的)にとることができないというものである。

学童期から思春期にかけて、子どもたちの自我理想が高まり、憧れの対象に対する強い

同一化(取り入れ)が起こるが、S子にもそのような強い同一化の心性をみとることができる。しかし、S子の場合、憧れの対象のようになりたい、対象に近づきたいという欲求が強まると、それに抗するように、周囲の人からそのようなしてはいけなと言われているように思う、つまりその対象から回避しなければならぬという気持ちが強まってくる。取り入れをめぐる強い葛藤が、S子の苦悩の中心にあることがわかる。

取り入れをめぐる葛藤と 関係欲求をめぐるアンビバレンス

このような取り入れをめぐる強い葛藤は、対象(他者)といかにかわり合うか、そのかわり方の特徴を示している。ここですぐに想い起こされるのが、乳幼児期早期の自閉症児に顕著に認められる養育者に対して向ける関係欲求をめぐるアンビバレンスである。

彼らは養育者とかかわり合いたいという気持ちを抱くものの、いざ養育者がかかわり合おうとすると回避的な反応を示す、その一方で養育者から放り出されるとかまってもらいたいという思いが強まっていく。そのため両者のあいだで関係の悪循環が生まれ、かわり合うことの難しさはどんどん肥大化し、そ

の結果、多様な臨床上の問題が生まれてくる
と考えられる。

このような乳幼児期の子どもと養育者との
かわり合いが、その後の彼らのこころの発
達にどのような影響を及ぼすのかを考えるう
えで、この事例に認められた取り入れをめぐ
る葛藤は大変に興味深い。

すぐに気づかされるように、S子の内面の
取り入れをめぐる葛藤と乳幼児期の自閉症に
特徴的な養育者に対する関係欲求をめぐるア
ンビバレンスは、対人的構えにおいて同質の
ものである。乳幼児期の対人的かわり合い
の体験の蓄積が子どもたちのこころに内在化
(内的ワーキングモデル)して、今のS子の
こころのあり方を特徴づけている。乳幼児期
の自閉症の子どもたちに認められる関係障碍
の質的問題が、彼らのこころの発達に色濃く
影を落としていることを、そこに見出すこと
ができるのである。

乳幼児期には関係欲求の主たる対象は養育
者であるが、思春期になるとそのような対象
は憧れの人物へと変化していく。その憧れの
対象を取り入れ、それが核となって、思春期
における自己像(自分らしさ)が形成されて
いくというのが本来の思春期の同一性獲得の
過程であることを考えると、S子に認められ
た取り入れをめぐる葛藤は、思春期の自我同

一性の形成過程の根幹をゆさぶるほどに大き
な意味を持っている。それは「主体性」の問
題として捉えることもできるように思う。

「主体性」の問題の 起源をめぐって

青年期ASに認められる「主体性」の問題
の起源が乳幼児期早期の養育者との関係の質
と関連しているとすれば、それはどのような
形で具現化しているのだろうか。関係発達
臨床の場である母子ユニット(Mother-
Infant Unit: MIU)で最近経験した事例を
通して考えてみることにしよう。

母子分離と母子再会場面における母子コミュ ニケーションの特徴

MIUでは初回セッションで新奇場面法
(Strange Situation Procedure: SSP)を实
施している(図1)。SSPは愛着パターン
の評価法として世界中で広く実施されている
ものであるが、われわれは単に愛着パターン
を判定するということに力点を置かず、母子
分離と再会の際に認められる相互の反応のあ
り方に着目しながら実施している。そこでの
相互の反応を通して、母子コミュニケーション
の機微を捉えることができるのではないかと

と考えている。彼らの対人的態度にみられる
アンビバレンスは、MIUで対象となった事
例すべてにおいて認められるが、その中から
典型的と思われる例をひとつ取り上げる。

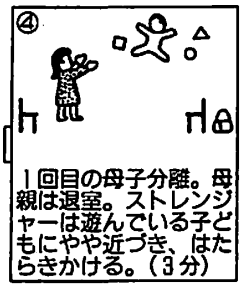
〔事例2〕Y子(初診時一歳九カ月、高機能自 閉症)

主訴：視線が合いにくい、呼びかけに反応
しない、喃語のような発声ばかりで有意語は
ない、ひとり言のようにぶつぶつぶややく、
気移りがはげしい

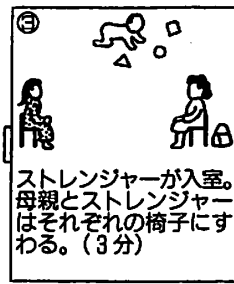
知的発達水準：全体発達指数DQ70(津
守式精神発達検査)。社会、言語および理解
が特に低い。

家族構成：父親、母親(専業主婦)、Y子
の三人家族。

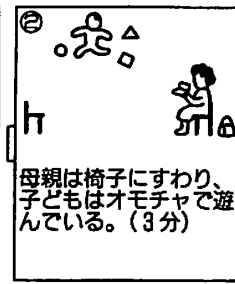
生育歴：乳児期、Y子は母乳を飲みながら
ず、飲ませようとするとY子は母の胸に手を
あてて押しのけ、授乳されるのを嫌がってい
た。そのため母は搾乳して飲ませていた。た
だY子は抱かれることは嫌がらなかったの
で、抱いていることが多かった。生後五カ
月の時、母が手首の腱鞘炎になり、治療のため
安静にするように言われ、Y子を抱くことを
極力減らすようにした。泣けば抱くようにし
ていたが、抱いてやれないときは激しくずつ
と泣き続けていた。生後八カ月には母に対す



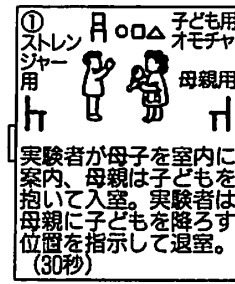
④ 1回目の母子分離。母親は退室。ストレンジャーは遊んでいる子どもにやや近づき、はたらきかける。(3分)



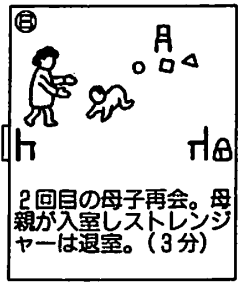
⑤ ストレンジャーが入室。母親とストレンジャーはそれぞれの椅子にすわる。(3分)



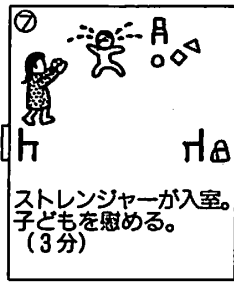
⑥ 母親は椅子にすわり、子どもはおもちゃで遊んでいる。(3分)



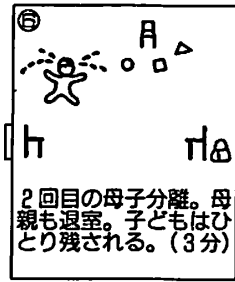
⑦ 実験者が母子を室内に抱いて入室。母親も退室。実験者は位置を指示し(30秒)



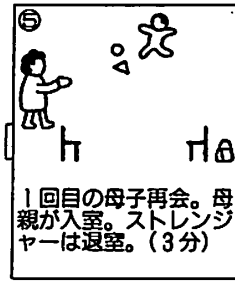
⑧ 2回目の母子再会。母親が入室しストレンジャーは退室。(3分)



⑨ ストレンジャーが入室。子どもを慰める。(3分)



⑩ 2回目の母子分離。母親も退室。子どもはひとり残される。(3分)



⑪ 1回目の母子再会。母親が入室。ストレンジャーは退室。(3分)

図1 新奇場面法

柏木恵子・古澤頼雄・宮下孝広「発達心理学への招待」62頁、ミネルヴァ書房、1996年

を見せるようにしたら、シマジロウや英語のビデオを一日数時間見るようになった。当時からアルファベットのには興味を示し、母のシャツの文字を見て指差していた。また、家中に貼られていた「あいいうえお」表を見続けたり、車のナンバープレート上の数字を見続けたりしていた。一歳六か月、横目で斜め見をするようになったが、一〜二週間で消失した。この頃から呼びかけても反応しなくなり、視線も合いくなくなった。一歳六か月健診、多動で、明らかに他児と違うことに母は気づいた。以後、Y子に対する接し方をいろいろと工夫するようになった。父も母と一緒にあって、夜、遊びの相手をしてやると、喜んで楽しみにするようになった。母が手遊びをしようと、よく見て真似をするようなところも出てきた。

一歳九か月、他院から筆者を紹介され母子同伴で受診。自閉症と診断され、MIUでの支援が開始された。

SSPにみられる特徴：母子二人で自由に遊んでいる時(図1の②)、スタッフの存在に気後れや人見知りすることなく、玩具に興味を示してひとりで遊び始めた。母と一緒に遊ぼうとしていろいろと働きかけていたが、Y子はほとんど反応を示さず、下を向いたり、背を向けるなど、母に対して回避的な反応が印象的であった。そんなY子に対して、母はどうしたらよいか途方に暮れているようで、遠く離れたところで正座をしてY子の様子を見ていた。

ストレンジャー(ST)が入室すると(同③)、Y子はボールテントの出入り口のところから覗いてストレンジャーを窺っていたが、目が合うと覗くのをやめてテント越しにじっと見つめ、強い警戒心を見せていた。

一回目の母子分離(同④)、母が退室するとすぐに気づいたが、ボールテントの中に入ったままボールを扱うこともやめ、急にまったく声も出さなくなり、じっと周囲の様子を窺うようにして身を硬くした状態がしばらく続いた。母との直接的なかわりは避けながらも、いざ母親が目の前から姿を消すと、明らかに不安と緊張が高まる様子であった。

一回目の母子再会(同⑤)、母が入室してくると自分のそばに来るまで母のほうをじっと見ていたが、いざ母が目の前に来ると視線を反らし、まるで吸い寄せられるように、Y子の注意は退室するSTのほうに移ってしまった。ソフトブロックで遊んでいたY子の正

る後追いはつきり認められた。一〜二か月で歩き始めると周りの物への関心がふえ、あちこち歩き回るようになり、抱っこを求めなくなった。

一歳、非常口のマークなど、独特な物に興味を示すようになった。一歳二か月、ビデオ

一歳九か月、他院から筆者を紹介され母子同伴で受診。自閉症と診断され、MIUでの支援が開始された。

SSPにみられる特徴：母子二人で自由に遊んでいる時(図1の②)、スタッフの存在に気後れや人見知りすることなく、玩具に興味を示してひとりで遊び始めた。母と一緒に遊ぼうとしていろいろと働きかけていたが、Y子はほとんど反応を示さず、下を向いたり、背を向けるなど、母に対して回避的な反応が印象的であった。そんなY子に対して、母はどうしたらよいか途方に暮れているようで、遠く離れたところで正座をしてY子の様子を見ていた。

面に母が座って手を貸そうとすると、Y子は母を回避するようにその場から離れてソフプロックが入れているカゴのほうへ移動してしまった。母もY子にどうかかわったらいいかわらない様子で、その場に座ったままY子を遠くから眺めていた。

二回目の母子分離(同⑥)、母が退室するとY子は不安そうな表情をして遊びが手につきなくなり、不安げな声を発しながら室内を歩き回り、母が退室したドアのところへ行った。母を直接追いかけるような行動は取れなかったが、最初の分離の時よりも母を求めめる気持ちは表に出るようになり、STの手を取って母のところへ連れて行くように要求した。しかし、まだ不安の表出の仕方は弱々しいのが印象的であった。

母との二回目の再会(同⑧)、母が入室するとすぐにY子はうれしそうな表情を浮かべて歩み寄り、母の手を取って遊びに誘った。母の手を引いてボールテントのところまで来ると、Y子はボールテントの中に入り、うれしそうにボールを蹴ったり、かき回したりしていた。その時、母はなんとかボールのやりとりをしたかったのであろうか、はつきりとした口調で「Yちゃん、はい、どうぞ」とY子の目の前にボールを差し出して誘った。するとなぜかY子は途端に母に背を向けてしま

い、母との交流は途切れてしまった。

ここでぜひ取り上げたいのは、Y子が母親に対して見せた微妙な気持ちのゆれである。母親がいなくなると、Y子に不安な気持ちがどんどん高まっていることは筆者にはひしひしと感じられたが、母親を追い求めて強く自分を主張することはしない。どこか回避的な態度が目立っている。

その最も象徴的な反応が母子再会場面での母親に向けた気持ちのありようである。母親と再会してうれしかったことは確かだと思われるが、なぜか母親が子どもに接近していざかかわろうとすると、途端にY子の注意と関心はSTに移り、まるで母親への思いはその場から消えたかのような態度である。激しく母親を求めようとしないのである。

このようなアンビバレンスの強い状態にあると、周囲の対人刺激に容易に吸い寄せられるようにして、そちらに注意や関心が移ってしまっていることがわかる。安心感のない警戒的な状態にあつてこのように周囲の対人刺激に容易に引き寄せられ、動かされてしまうのは、Y子の行動が原初的コミュニケーション世界(本能水準)に強く依拠した反応であるからである。

本来の養育者に対する関係欲求が直接的に

表現できない状態にあつては、このように外界刺激によつて彼らは容易に動かされてしまう。警戒的構えの強いY子が外的刺激に容易に反応してしまうのは、本能的で意識の介在しない自動水準の行動だからなのであろう。みずからの本能欲求に基づいて行動するという主体的な行動がきわめて困難であることと、このような強い警戒心ゆえの本能的な反応が生まれやすいことは、表裏一体の関係にあるといつてもよいのではないかと思う。

われわれはY子のセッションを重ねていくうちに、一緒に遊んでいる最中にも、このような周囲の刺激に容易に動かされやすい傾向を頻回に認めたのである。

初回からY子はMIUにあつたビニールの大きなフープに興味を示し、母親に床に立てて回すように要求するようになった。第三回、フープを目にすると、自分から要求して母にフープを回してもらった。しかし、それに夢中になることはなく、フープの先の、遠くにあつたおもちゃ箱の中のミニチュアの哺乳瓶が目に入ったのか、突然それを取りに行つたため、それまでの母子二人の遊びは途切れてしまった。さらに、Y子は母にお手玉のようにしてボールをポーン、ポーンと投げてもらい、それを見て嬉しそうにしていたが、

突然上がったボールに合わせて上を向いた拍子に、天井のカメラが目に入ったのか、それに目を奪われてしまい、じつとカメラに見入ってしまった。唐突に注意がされるために、一緒につき合っているわれわれも楽しい気分が持続せず、そのたびにどこか寂しい思いを味わうのであった。

初期のセッションにおいて、Y子の遊びにつき合っていて実感するのは、Y子が何か遊びに興じているように見えても、実際には心底夢中になって楽しんでいてのではないという事である。他の対象刺激が視野に入ると、途端にそれに吸い寄せられるようにして、注意や関心がそちらのほうに逸れてしまうのも、そのためなのではないかと思われるのである。

自閉症の子どもたちは関係欲求に限らず本能欲求全般にわたってアンビバレンスが強い。そのため、彼らは本能欲求に基づく行動をとることができない。おそらく彼らにとつての主体性の問題の起源には、このような本能次元の問題があるのではないかと思われるのである。

そのように考えると、彼らの主体性をはぐくむという発達支援がいかに大変な営みかが想像できるであろう。

「主体性」をはぐくむために

Y子に限らず PDD の子どもの自発性、能動性を大切にしたいかわり合いを志向していくと、最初に遭遇するのは、彼らが第三者の目には単純で同じような遊びを繰り返す場面につき合わされることである。多くの場合、このような遊びがなぜ彼らには楽しいのか、容易には感じ取ることができない。おそらくは彼らの体験世界では、生々しい感覚体験として心地よいものとなっているのであろうが、われわれは彼らの遊びを広げなくては、発展させなくては、という発達促進的な働きかけに駆り立てられやすい。そこには発達に關するある種の価値観（とらわれ）が暗黙のうちに働いている。

世間体や他人の目などに強く動かされていればいるほど、われわれは子どもに働きかけて動かそうという思いに駆られやすい。そうしたわれわれの思い自体が、彼らの主体性を損なうことになる。彼らにかかわっていること、われわれはどのような思いから自由になることの大切さを思い知らされるようになる。

先のY子の関係発達支援においても、母親は非常に熱心にY子の遊びにつき合っている

たが、Y子がいつも決まり切った遊びを繰り返すのを見ていて、内心は不安と焦燥感に駆られ、もつと他の遊びに発展させていかねばという思いを強く抱いていた。

このような母親の子どもへの強い思いには、母親自身の幼少期の被養育体験が深く関係していることがまもなくわかってきた。大変な努力家で稽古事の師匠でもあった（母方）祖母は弟子たちの前で子ども（Y子の母親）を育てる中で、周りの人たちから後ろ指をさされないようにいつも気を配っていたという。そんな祖母の姿を見て育った母親も周囲の目を気にしながら子育てに努力してきた。人一倍対他的配慮の強い母親に対して、そのような構えが緩むように助言していく中で、母親の肩の力も少しずつ抜けて、Y子の母親への回避傾向も和らいでいった。

このようにして、Y子は関係欲求に根ざした行動が直接的に取れるようになっていった。Y子の主体性が芽生えていく過程は、他者の目から自由になっていくという母親自身の主体性の回復過程と不可分に関連し合っていることを、筆者は教えられたのである。

おわりに

発達障碍に限らず子どもの精神発達、生誕後の養育者を初めとする他者との濃密な対

監修=岡崎祐士 | 青木省三 | 宮岡 等

こころの科学 123

HUMAN MIND September 9・2005

【特別企画】

ひきこもり

斎藤 環/編

ひきこもりと哲学 中島義道

ひきこもりガイドラインの反響と意義

伊藤順一郎・吉田光爾

「ひきこもり」の統計とその周辺 三宅由子

ひきこもりの歴史的展望 倉本英彦・大竹由美子

ひきこもりと高機能広汎性発達障害 杉山登志郎

ニートとひきこもり 玄田有史

「ひきこもり検討委員会」 顧末記 目良宣子

教育の視点から見たひきこもり

—深刻化するコミュニケーション不全 尾木直樹

極私的不登校闘争二十年史序説 山登敬之

「学校」の問い直しから「社会」とのかかわりの

再考へ—不登校の「その後」をどう語るか 貴戸理恵

《当事者の語り》をめぐって 上山和樹

フリースクールからの報告 野田隆喜

韓国ひきこもり事情 呂 寅仲

ネット依存とひきこもり 金 鉉洙

ひきこもりの個人精神療法 斎藤 環

ポール・ヴァレリーと青年期危機 中井久夫

●巻頭に—経済不況と精神科臨床 青木省三

●論説

「エクソシスト」と精神科医学教育 小澤寛樹

あの日からのこと

—原爆で子どもを失った夫婦の物語 林 雅行

●連載

初心者のための心理療法入門 村上伸治

タイムマシン心理療法 黒沢幸子

うつ病の真実 野村総一郎

人格障害という「現象」 林 直樹

日常性の心理療法 大山泰宏

●ほんとの対話

●こころの現場から

タカシ君の選択 (養護学校) 鈴木彰典

朝の風景の中で (小学校) 山際敏和

好評発売中 1333円+税

www.nippsy.co.jp/

日本評論社

人 (interpersonal) 交流の体験が日々蓄積され、次第にそれが個人内 (intrapersonal) に取り込まれていく過程として捉えることもできる。したがって、乳幼児期早期に深刻な対人関係の問題を抱きながら対人交流を蓄積していくことは、その後の彼らの成長過程に深刻な問題を生み出していくのである。

主体性 (subjectivity) は主観性 (subjectivity) をも意味することからもわかるように、主体性をはぐくむという発達支援の営みは、彼らの気持ち (こころ、主観) を大切にしてい

いくことを抜きには考えられない。関係発達臨床において、われわれが情動 (気持ち) のありようを常に強調しているのは、彼らの主体性をはぐくむことを支援の中心に捉えているからである。

主体性をはぐくむという営みの困難さと大切さは、人間のこころの発達という長期的視野に立つことによって初めて気づかされるものである。短期的な成果に目が奪われやすい昨今の療育現場で主体性をはぐくむことはいよいよ困難な状況にあるように感じられる。

そこでの当事者はもとより、援助者自身の主体性はどうかになっているのであろうか。

〔文獻〕

(1) 小林隆児「広汎性発達障害にみられる『自明性の喪失』に関する発達論的検討」『精神神経学雑誌』一〇一巻八号、一〇四五—一〇六二頁、二〇〇三年

(2) 小林隆児「自閉症の三大行動特徴をどのように理解するか」(小林隆児、鯨岡峻編)『自閉症の関係発達臨床』五八—六四頁、日本評論社、二〇〇五年

(3) 小林隆児「関係発達支援の基本について」(小林隆児、鯨岡峻編)『自閉症の関係発達臨床』六五—六九頁、日本評論社、二〇〇五年

(4) 小林隆児「発達障害における『発達』について考える」『そだちの科学』五号、二一—八頁、二〇〇五年

(こばやし・りゅうじ/精神医学)